

▼書評

田野大輔著 『愛と欲望のナチズム』

(講談社、二〇一二年九月、二九四頁、一八〇〇円＋税)

小野寺拓也

「ナチズム研究の無意識化」。本書が棹さず流れは、突き詰めればその一言に要約できるだろうか。キッチンやレシピ(藤原二〇一三)、モーツァルト(リーヴィー二〇一三)、クリスマス(小野寺二〇一三)、そしてセックス。一見「楽しげ」で平凡な日常的意識、身体・感情・欲望・無意識とナチズムとの関係を問おうとする近年の研究潮流には、ナチ体制を「下から」支えた膨大なエネルギーはどこに由来していたのか、という問いが通底しているように思われる。ナチ体制が「賛同に基づく独裁」であることは、九〇年代以降数多くのミクロ的な視点をとる研究によって明らかにされてきている通りであるが、「アーリア化」や「密告」といった「政治的」な日常性だけでなく、ナチ体制に限らずどの近代社会にも見られるような領域に着目することで、そのエネルギーのありかをさらに深掘りしようとするのが、近年の潮流と言える。「性的タブーの撤廃」を通じた「欲望の動員」のありようを問う本書も、まさにそうした問題を正面から論じるものにほかならない。

それでは、とくに性欲やセクシュアリティという観点から社会を論じること、どのような利点があるのだろうか。評者は本書を通じて、以

下の三点に気づかされた。

まず第一に、イデオロギーの恣意性や構築性が、よりクリアに析出できるという点である。性欲はほぼ誰もが持つ普遍的なものであると同時に、意識的にコントロールすることが難しい。しかしそれを何とかしてコントロールし、何になら性欲を感じて良いか、何に感じてはいけないか、何を目的として性欲を行使すべきなのか方向付けしようとするのが、イデオロギーである。ナチ体制において肯定される欲望はあくまで女性に向かうもののみであり、男性同士の同性愛は「国家政治的危険」、自慰は「精子の浪費」と見なされた。もちろん現実社会において、「よい」セクシュアリティと「悪い」セクシュアリティをそのように白黒切り分けることは困難であり、ナチ体制もたとえば、健全な裸体と卑猥なヌードをいかにして区別するか、という問題に直面せざるを得なかった。「生の肯定」は一種の「性愛の認可状」と解釈され、体を鍛える女性の健全さも、「健康なエロティシズム」として受け取られる危険性が常に存在した。「このように見ると、健康な肉体と猥褻な裸体の間には、わずかな距離しかなかったことが明らかとなる。実際のところ、両者をはっきりと区別することは困難だった」(本書一四六頁)。しかしだからこそ、その曖昧な境界線を敢えて引こうとする力学が働くのである。すなわち「汚く不健全な」女性が、ヴァイマルという「崩壊時代」やユダヤ人と結びつけられ、「女性を慰み者へと浅薄かつ軽薄に貶め」、「まったくのあからさまな性欲という意味で、健全で自然な肉体的情を不快に歪曲する」(一四七頁)ものとして攻撃される。イデオロギーはこのように区別の困難なものを敢えて区別することで、セクシュアリティを特定の方向へと「水路付け」(一三八頁)し、動員しようとしたのである。

第二に興味深いのは、山口定が言うところの「周辺の思想要素」がもつ独自の求心力が、セクシュアリティという領域でもはつきりと確認できることである。D・ヘルツォークの言葉を借りれば、「イデオロギーは矛盾を通じて機能する」（ヘルツォーク二〇一二・二六四頁）。すなわち、イデオロギーが求心力が発揮するのは、その中核的要素が理解されたからではなく、むしろ「その核心をとりまく、さまざまの周辺の思想要素がそれぞれに独自に牽引力を発揮するからなのである」（山口二〇〇六・一四六頁）。本書におけるそうした例を二つあげるとすれば、一つはG・オツケルやJ・H・シュルツといった科学者たち、もう一つが裸体文化雑誌である。クエーカー教徒であり、平和主義的な傾向を示していたオツケルは、性生活への「誤った羞恥心」を克服する必要があると考えて性的啓蒙活動を行っていた。またシュルツの精神療法は本質主義的な排除ではなく、治癒と社会復帰による包摂を目指すものであった。このように彼らは出発点においてナチ体制とまったく違う意図を持っていたが、市民道徳を批判し、あるいは同性愛者を異性愛者へと「転極」させるといふ点において、結果的にナチスの人口・人種政策と一致し、少なからぬ貢献をすることになる。他方数多くのヌード写真を掲載する裸体文化雑誌は、「健全で自然な肉体感情」の意義を強調し、人種の健康を錦の御旗として掲げてはいたものの、実際には「読者の下卑た欲求に迎合する姿勢」（一三三頁）が濃厚な「代用ポルノ」であった。しかし氾濫するヌードはヒトラーによって称賛され、市民社会の性の抑圧への反発、教会批判、生の喜びと人種の模範という建前Ⅱイデオロギーへと回収されることになる。「芸術の提示する裸体が人種的な美の模範となり、人口・人種政策の一翼を担うべきだというのだが、そうした役割をはたす上でも、鑑賞者を惹きつけるだけの誘因が必要だっ

た。美術評論家たちがエロスの効用に言及していたのは、そのためだったといえよう」（二三八頁）。さらにゲッベルスに至っては、イデオロギー観念的なエロスの擁護などに関心はなく、裸体の提示によって民心の維持が出来るかどうかの方がよほど重要であった。このように、歴史主体が多様な思惑を投影することで、イデオロギーは結果的に強化されるのである。

第三に、フリーコー的な意味での「主体性」の陥穽が、セクシュアリティにおいては他の領域以上に明確に現れるという点である。人間は常に自分の欲するところを自覚しているわけではなく、自立した個人が自らの自由意志に基づいて行動するという啓蒙主義的な主体像はその意味でかなりの程度虚構と言えるのだが、セクシュアリティは他の領域以上に流動的であり、無意識に根ざしている部分が大きいだけに、自らの欲望を自覚することにはとりわけ大きな困難が伴う。しかしそうした流動性、無意識こそが「欲望の動員」が付け入る隙となる。オルガスムスの意義を強調し性愛の喜びの向上を唱えることで女性の性的主体性を解き放ち、抑圧的な日常から束の間でも逃れることができる性生活という領域を保障する。これによって、体制は出生奨励策を人々に「自発的」に行わせ、「非政治的な領域の許容」を通じた大衆馴致を図るだけでなく、カリスマ支配に必要な「下から」のエネルギーを調達することも可能になるのである。「人々の関心をたえず性的問題に引きつけ、彼らを操作可能な状態にとめおく」、「健康美と猥褻さの区別を曖昧にしたまま、そこに欲望を誘導して操作する」（一六六頁）ことこそが、ナチスの「性政治」の本質に他ならない。このようにして欲望が「創造」され、水路付けられているにもかかわらず、主体はそのことを自覚することが困難な状態に留め置かれる。「主体的」であろうとすることによつ

て従属させられ規律化を受けるといふ、フリーの「主体」のパラドクスがこれほどクリアに現れることは、他の領域では難しいかもしれない。不定形で流動的であるからこそ、イデオロギーや「主体」をめぐる恣意性や構築性がよりクリアに見えてくるという利点の一方で、不定形で流動的であることの（研究対象としての）欠点も同時に見ておく必要があるだろう。大戦末期に「広範な国民の間に広がった『道徳解体現象』は、ナチズムによる性生活への介入の、望まざる副産物でもあったのである」（二〇〇頁）と著者も述べているように、不定形で流動的であるということは、体制がこれを完全にはコントロールしきれないことを意味していた。ゆえに、体制も場当たりの対応を取ることが多くなる。そこから体制の一貫した意図や戦略をくみ取るうとする作業は、いきおい困難な知的営為とならざるを得ない。

ナチ体制においてセクシュアリティが持っていた曖昧さや両義性は、先行研究においても指摘されているところである。A・グロスマンは、ナチズムがある種の性的急進主義と両立しようという認識は、ナチズムの新たな解釈への可能性を開くものであると述べつつも、ナチズムが伝統的・保守的な道徳規範とも完全に両立し、その点において教会や女性団体の支持を得られていたことを忘れるべきでない」と釘を刺す（Grossmann 2008）。D・ヘルツォークも、「ナチズムには性にかんする基本計画も首尾一貫した政策もなかった（そこには相対立する指令が奏でる不協和音しかなかった）が、伝統的な道徳に逆らうはつきりとした傾向がしだいに現れてきたことは確かである」（ヘルツォーク二〇一二二頁）と記している。ナチズムはセクシュアリティに対して急進的かつ保守的であり、意図的に行った政策がある一方で全体としては首尾一貫性に欠けていたという両義性やとらえどころのなさを、どちらも指

摘しているのである。

それに対して本書は両義性を一応は踏まえつつも、全体としては「意図的」な「性の解放」を強調している印象を受ける。たとえば、「ヒトラーの要求が、『生めよ殖やせよ』の出生奨励策と結びついていたことはたしかだが、そこに純粋な愛にもとづく結婚の倫理を説く、彼なりに真剣な主張が含まれていたことを見逃すわけにはいかない」（二二頁）、「性欲の充足を奨励するヒトラーの発言が、部下たちの放縦な行動を正当化するだけのものではなく、それなりに明確なイデオロギー的裏付けをともなっていたことにも、注目しなければならない」（一四―一五頁）といった記述がそれである。しかし本書を丁寧に読み進めていくと、微妙に論旨が「揺れ」ていることにも気づかされる。たとえば、性の肯定はあくまで、「子どもの出生をもたらすかぎりのものであったことはたしか」（一九頁）であり、婚前交渉も「子供の出生が増えることを期待」してのことであった（九五頁）と指摘する一方で、「性愛の賛美は、子孫の繁殖をめざす出生奨励策の装飾にとどまるものではな」（二二頁）く、ヒムラーも「性交そのものに積極的な意義を見いだしていたことも事実」（九五頁）といった主張も見られる。「物質主義的な文明の批判、自然への回帰、裸体文化運動、キリスト教攻撃と旧来の禁欲的な性道徳批判」という「それなりに明確なイデオロギー的裏付け」の一方で、支配に有用ならばそれだけでよいというゲッベルスのプラクティカルな見解、「恋愛や結婚を印象操作の道具程度のものとしか見ていない」ヒトラーの「シニシズム」（二二五頁）も指摘される。

こうした「揺れ」は筆者の分析手法の問題というよりは、研究対象が不定形かつ流動的であるがゆえの「揺れ」なのであろう。セクシュアリティ、「生の肯定」、欲望、感情。理性や客観世界ではなく、「主観的自

己、感覚、経験」（エクスタインズ一九九一・四一九頁）とでも言うべき、「様式や気分」の問題こそが、おそらくは筆者が格闘している研究対象なのである（前著『魅惑する帝国』で取り上げられたキツチュという問題と、この点で通底している）。しかしそうであっても、なぜそのような「揺れ」が生じざるを得ないのか、「性の解放」という感情の表出自体が自己目的化している局面と、そうした感情を政治的資源として利用しようとする局面が交互に出てくるのはなぜなのか、その構造をより「深掘り」する試みはなされてもよかったように思われる。

しかし筆者の問題関心はおそらく、そうした構造的な深掘りよりも、リスペクタビリティに対する「偽善性」「二重道徳」批判が持つ政治的含意を明らかにすることの方にあるのだろう。ナチ体制は、道徳と現実の「ズレ」を効果的に政治利用した。時に「偽善」批判を展開してキリスト教道徳の非現実性を嘲笑し、時に性道徳の「退廃」への憤りを煽った（レーム事件など）。方向性は逆だが、いずれもズレを利用したものである。前者においては、非現実的な規範の現実からのズレ、後者はあべき規範からの現実のズレである。

こうした批判は大衆政治、とくにカリスマ支配においてはきわめて有効な政治・感情資源となりうる。非常に「わかりやすく」、問題の所在を理解する上でほとんど知的リソースを必要としないからである。規範と現実が「ズレ」ているということが示されれば、それでよい。なぜその両者がズレざるを得ないのか、ズレによって得られる政治的利益はなのかといった複雑な問題は、一切顧慮されない。とにかく「ズレ」ているという事実だけで十分なのである。これによってきわめて多くの人々の共感を集め、反発や嘲笑（およびその強烈なエネルギー）を特定政治的敵に対して動員することが可能になるのである。「道徳」は

強烈な感情を喚起しうる、格好の政治的資源である。

しかしどのような政治体制であっても、この「ズレ」を逃れることはおそらく不可能である。いかに高邁な政治的理想を掲げる体制であっても、秩序を維持していく上で容認せざるを得ない現状というのはある。本書の記述で興味深いのは、「偽善」批判を展開していたナチ体制自身も、結局は偽善批判にさらされていく過程である。たとえば、舞台でのヌードの提示を黙認しつつ、その卑猥さを非難するという二重基準がそれである。「親衛隊機関紙がヌードダンサーを『破廉恥な商売』とのしり、警察の介入さえちらつかせるのなら、なぜこれを全面的に禁止しないのか。このような『破廉恥な商売』の存続を許しているのは、ほかならぬ当局者の側ではないのか」（二六五頁）。これは、裸体の提示によって民心をつなぎ止めつつ、セクシュアリティを特定の方向に誘導するために「敵」をつくったナチ体制の、不可避的な帰結であったといえる。

このように本書を一読してあらためて感じるのは、セクシュアリティのとらえどころのなさ、アンビバレントさである。ヘルツォークはこう指摘する。「セックスが常に人を幸せにするわけではない。」「同意に基づくセックスであっても、結局の所、多くの混乱した感情を引き起こす場となり得る」（Hezog 2010: 2）。自発性にもとづく抑圧の少ないシステムが望ましいことは明らかであるにせよ、本書が示したように「自発性」は容易に政治動員される。また、性の解放が自己目的化したことが「一九六八」の失敗の原因でもあった。こうしたアンビバレントさは「偽善」についてもあてはまる。容認できない偽善はもちろん存在するが、憤激や嘲笑は体制にとって貴重な感情資源となり、「偽善」批判の自己目的化はつねに危うさをはらんでいる。こうしたとらえどころのな

さやアンビバレントさと、どのように向かい合うべきか。本書は、そうした歴史学（や学問一般）の抱える大きな課題と、今後立ち向かうべき挑戦とを、わたしたちに突きつけているのである。

【参考文献】

モードリス・エクスタインズ、一九九一、金利光訳『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』TBSブリタニカ。

藤原辰史、二〇二二、『ナチスのキッチン——「食べること」の環境史』水声社。

Grossmann, Atina, 2008. *Sexualität, Körper und das große Unbehagen*. Kontinuitäten und Brüche in der deutschen Geschichte des 20. Jahrhunderts.

in: Hagemann, Karen/Quataert, Jean H.(Hg.), *Geschichte und Geschlechter. Revisionen der neueren deutschen Geschichte*, Frankfurt a.M./ New York, S.290-316.

Herzog, Dagmar, 2010. *Sexuality in Europe: A Twentieth-Century History*, Cambridge.

ダグマー・ヘルツォーク、二〇二二、川越修・田野大輔・荻野美穂訳『セックスとナチズムの記憶——二〇世紀ドイツにおける性の政治化』岩波書店。

エリック・リーヴィー、二〇二二、高橋宣也訳『モーツァルトとナチス——第三帝国による芸術の歪曲』白水社（原著：二〇一一年）。

小野寺拓也、二〇二二、『穏やかな』戦場のメリークリスマス
一九四四『専修史学』五三、一—三六頁。

山口定、二〇〇六、『ファシズム』岩波書店。

（おのぞら たくや・お茶の水女子大学非常勤講師）

